部門別ブックガイド

入門書から専門書まで

❶ 地域・都市計画

加藤　晃

地域計画・都市計画のブックガイドを簡単にまとめることはとても難しい．その主な理由は，① 地域・都市計画の分野は土木工学や建築学の応用技術を中心とした分野ではあるが，建設技術だけでは包含できない幅広い関連分野（例えば，地理学，社会学，経済学そして農学や医学までも）にまで裾野を広げていること，② 地域・都市計画は，人間の活動・生活の空間を扱うがゆえに，力学を中心とした土木の他の分野とは異なって地域・都市の考え方に多少の立場の相違が入ること，である．特に前者の性格は，都市計画を概論的に学ぼうとする学生・初心者と，すでに都市計画の分野に携わっている者とでは，読書内容が著しく異なる傾向がある．しかも，専門技術者たちの求めるものは，都市交通，土地利用，都市開発・再開発，環境あるいは都市経営といった広い範囲の専門的知識にまたがる．この広範な要求に応じてブックガイドをまとめることが難しいのを承知で和書についてまとめてみた．

1．昭和年代前半の名著

すでに歴史的な書物になった感があるが，内山新之助著『都市計畫』（常盤書房，昭和6年），関一著『住宅政策と都市計畫』（弘文堂，大正12年），武居高四郎著『地方計画の理論と実際』（山海堂，昭和13年），石川栄耀著『都市計畫及国土計畫』（産業図書，昭和15年）などの和書とアダム・スミス著／五十醇嵐三訳『都市計畫における最近の進歩』（昭和11年）などは，戦前に出版された都市計画・地域計画に関する優れた教科書であり，啓蒙書であった．石川栄耀は戦後に前書を全面的に改訂し（昭和29年），また，武居は『新都市計画』（秋田屋，昭和22年），『都市計画』（共立出版，昭和22年）を書いて，新しく翻訳されたレービス著／都市交通研究会訳『最新都市計画』（コロナ社，昭和26年）とともに折からの戦災都市の復興など多くの都市計画にの多大の知識と資料を提供した．また，初心者向きの専門書としては谷藤正三・奥田教朝著の『新制道路・都市計画』（オーム社，昭和30年）が出版された．

これらの本はすでに入手しにくいものもあるが，戦前戦後を通じて学生，専門家に都市計画の指針を与えてきた名著であろう．

2. 教科書・入門書類

都市計画の全ぼうを概論的に理解するのには，教科書ないしは入門書をひもとくのが早道であろう．幸い今日では都市計画に関しては多くの教科書・入門書が揃っている．ただ，地域計画については都市計画の書物の一部に組み入れられたものは多く見受けられるが，独立して書かれた入門書類は少ない．

戦後の一時期をすぎて，都市計画の教科書・入門書が多く出版されるのは1960年代に入ってからである．教科書として代表的なものに，谷口成之著『都市計画』(コロナ社，昭和36年初版,同49年改訂)，小川博三著『都市計画』(共立出版，昭和41年初版，同44年増補)，市川清志・横山光雄ほか著『都市計画』(彰国社，昭和39年初版，同47年新訂)，井上孝・新谷洋二ほか著『都市計画—都市問題講座 7』(有斐閣，昭和41年)，松井達夫・大庭常良ほか著『都市の総合計画』(科学技術センター，昭和41年)がある．谷口のものは交通関係が多少過重であるが都市計画全般にわたって書き込まれており，小川のそれは都市形成の歴史および地理的背景に明快な整理があり，井上ほかのものは都市問題との対応から都市計画を体系的に眺めており，市川ほかの都市計画は建築学的な視野から書かれ，地域・農村計画にもふれて施設配置に詳しい．松井ほかのものは，地方自治体の実務者向きの現実的なテキストとして書かれている．それぞれに特徴があるが，共通して内容が充実しており，今日まで標準的な教科書として長い寿命をもったものが多い．1960年代には，このほかにもう少し簡易にまとめられた入門書的なものとして，伊藤通畦著『都市の生態と計画』(技報堂，昭和36年)，鈴木信太郎著『新しい都市計画の方向』(山海堂，昭和37年)，平川保一著『都市計画概論』(昭和36年初版，同44年改訂)，田住満作著『都市計画入門』(理工図書，昭和37年初版，同49年改訂)，今野博著『都市の開発』(山海堂，昭和38年)，松井達夫ほか著『都市計画入門』(コロナ社，昭和38年)，町田保著『都市計画』(地人書館，昭和42年)などがある．このうち，田住と町田のものは入門書として都市計画全体を要領よくまとめてあり，読み物としても面白い．また，松井のものは高校生の参考書として読み易く書れている．

1970年代の前半にも多くの教科書が著述された．主なものを拾えば，西山卯三ほか著『都市計画と町づくり』(汐文社，昭和46年)，川名吉衛門著『都市計画』(大明堂，昭和47年)，米谷栄二ほか著『地域および都市計画』(コロナ社，昭和47年)，今野博編『都市計画』(森北出版，昭和47年)，渡部与四郎著『都市計画・地域計画』(技報堂,昭和48年)，奥田教朝・吉岡昭雄著『都市計画通論』(オーム社，昭和48年)などである．西山の本は住民側からみた都市計画を論じており，その意味では他の書物と異なるが，行政側で都市計画に携わる者にも一読をすすめたい．川名のものは，内容に濃淡があり，近代の都市発展の歴史的な経緯と地区配置に詳しいが交通計画等は簡略である．米谷のものは，高専・短大向き教科書として，環境整備の問題や平易な数量的手法を紹介して適切である．最新の三著は，偶然であろうが著者が共通して都市計画の実務担当者である．したがって，都市計画の実施方法，技術的手法について手堅い．今野のものが実務的な面からは最も詳しく教科書よりもやや専門書に近い．他の二著は教科書として読み易く適切なものであるが，渡部のものは理論から適用への展開を示し例示が多いのが特色であり，奥田・吉岡のものは都市計画の内容を体系的に要領よくまとめて初学者に理解し易くしたところに特色がある．この年代には，以上のほかに入門書として，吉野正治著『都市計画とは何か』(三一書房，昭和45年)，結城清吾著『現代の都市・農村計画』(経済住来社，昭和47年)がある．また，テトロー，ほか著／伊藤滋ほか訳の『都市計画概説』(鹿島出版会，昭和50年)は，内容の充実した入門書といえる．

3. 専門書

都市計画や地域計画は包含する範囲が広いので，専門書は交通計画，土地利用計画，都市論といった各論ごとに詳述したものか，講座として体系化したものに分けられる．紙面が少ないので各分野ごとに特色のあるものを紹介しておこう．

都市論・都市計画論の分野では，マンフォード著／生田勉訳『歴史の都市・明日の都市』(新潮社,昭和34年)をすすめたい．都市と都市計画の歴史と将来への展望と警告が500頁の大著にまとめられており読みごたえのある著書である．小川博三著『記念碑都市』(技報堂，昭和45年)は，ヨーロッパにおける各時代の代表的な都市を多くの写真と図面で紹介したもので，いながらにして歴史上の都市にお目にかかれる楽しさがある．ハワード著／長素連訳『明日の田園都市』，ル・コルビジュエ著／坂倉準三訳『輝く都市』，ゴットマン著／木内信蔵ほか訳『メガロポリス』，ドクシアデス著／磯村英一訳『新しい都市の未来像』，ジャコブス著／木内信蔵ほか著『都市の原理』(いずれも鹿島出版会，1960年代)など都市計画にかなりの影響を与えた論文も関心のある向きは目を通されるとよい．日本のものとしては奥井復太郎著／日本都市学会編『都市の精神』(日本放送出版協会，昭和50年)，西川幸治著『日本都市史研究』(日本放送出版協会，昭和47年)，上田篤『日本都市論』(三一書房，昭和43

年）などがある．また，都市構造と都市計画の関係を追求したものとして，東京都立大学都市研究会編『都市構造と都市計画』（東大出版会,昭和43年）が力作である．このほか，都市問題全体を扱った講座に岩波書店から出版の『現代都市政策講座』（昭和48～49年）と，有斐閣からの『都市問題講座』（昭和40～41年）があり，ともに社会・経済・行政・土地・交通・計画を論じて執筆者の意欲がうかがえる論文が多い．また，もう少し軽いものに日本放送出版協会から出ている『現代都市学シリーズ』（昭和46年）がある．

土地利用の関係では，チェビン著／佐々波秀彦ほか訳『都市の土地利用計画』（鹿島出版会，昭和41年）が土地利用に関して広い範囲にわたって詳しい．また，土地問題講座の櫛田光男ほか編『土地利用計画』（鹿島出版会，昭和47年）は実務家にとって参考となる点の多い労作である．また，イギリスを中心に土地利用計画を紹介したハール著／大塩洋一郎ほか訳『都市計画と土地利用』（都市計画協会，昭和43年）も制度の沿革を知るのによい．区画整理関係では，都市整備研究会編『都市整備シリーズ（4巻）』（理工図書，昭和45年）が区画整理全体について詳しい．

都市開発・再開発に関するものとして，ジェコブス著／黒川紀章訳『アメリカ大都市の死と生』（鹿島出版会，昭和42年），ウィンゴ Jr. 編／佐々波秀彦訳『都市と空間』（鹿島出版会，昭和44年），また，新都市の計画を紹介したものに，ロンドン州議会編／長峰晴夫ほか訳『新都市の計画』（鹿島出版会，昭和36年），高山英華編『高蔵寺ニュータウン計画』（鹿島出版会，昭和42年），スプラインゲン著／波多江健郎ほか訳『タピオラ田園都市』（鹿島出版会，昭和51年）があり，イギリス，日本，北欧の新都市の計画および大都市圏計画が比較できて面白い．

都市交通に関しては，八十島義之助ほか編『都市交通講座』（鹿島出版会，昭和41年）が，交通と都市・経済・生活の関連および計画の実際など都市交通全体をまとめている．八十島・井上孝訳『ブキャナンレポート，都市の自動車交通』（鹿島出版会，昭和40年）は,自動車交通のあり方を示唆して興味深い．また，佐佐木綱著『都市交通計画』（国民科学社，昭和49年）は，都市交通の計画手法を体系的に述べて詳しい．渡部与四郎著『業務交通体系論』（技報堂，昭和51年）も，都市交通の実態をよく描いている．実務の参考という点では，広島都市交通問題懇談会編『広島の都市交通の現況と将来』（大蔵省印刷局，昭和46年）が有用と思われる．また，角本良平著『人間・都市・交通』（鹿島出版会，昭和49年）と同著者による『都市交通』（有斐閣，昭和41年）は，世界の都市交通を比較して，興味深い．OECD 編／岡並木監修『楽しく歩ける街』（パルコ出版，昭和50年）は，写真を多く使って歩行者空間を紹介して楽しい．

最近では，環境・公害関係，都市景観関係の良書も多く出版されている．その代表作としてバーロフ編／田村明監訳『人間環境都市』（鹿島出版会，昭和45年），館稔ほか編『公害―環境の科学』（毎日新聞社，昭和37年），米谷・磯村ほか編『人間と都市環境』（鹿島出版会，昭和50年），およびエクボの二つの著書，久保貞ほか訳『景観論』,『アーバンランドスケープデザイン』（ともに鹿島出版会）と，ターナード著／鈴木忠義訳『国土と都市の造形』（鹿島出版会，昭和41年）をあげておこう．

このほかに，公園計画・都市経営・地理・社会・経済と多くの関連専門書があるが，今回は割愛させていただく．紹介が片寄りすぎたかも知れないことをお許しいただきたい．なお，前回のブックガイド『都市計画関係』（土木学会誌，Vol. 59-9, p. 68）を参考にしていただければ幸いである．

（筆者・正会員 工博 岐阜大学教授 工学部土木工学科）

❷ 交通・道路

福田　正

すでに道路工学については，枝村俊郎氏（土木学会誌，55-5，p. 90）によって，都市交通については吉川和広（土木学会誌，59-9，p. 68），越正毅（土木学会誌，59-11，p. 78）の両氏によって，それぞれの専門書の紹介がなされている．そこで本文ではこれらの既出の図書は重複をさけたので，上記のブックガイドを併せてご覧いただきたい．

わが国の道路近代化は昭和29年度に始まる第一次道路整備5か年計画を契機としているといえるが，当時の道路工学の専門書といえば，武居高四郎著『道路工学』（共立出版，昭和25年初版），片平信貴著『道路工学』（技報堂，昭和31年初版）など二，三の図書に限られていたように思う．しかしその後，最近までに『道路工学』の標題で出版された図書は，筆者の知るところでは11冊に達している．道路工学は，計画，交通，舗装構造，舗装材料，施工法，維持管理と広範多岐にわたっており，これらの内容を網羅詳述することは至難であるに違いない．さらに，これらの図書の多くは，大学，高専